



長野県林業総合センター - 塩尻市片丘 5739
 Nagano-prefectural Forestry Research Center
 TEL 0263-52-0600 FAX 0263-51-1311

ササの管理

キ-ワ-ド: ササ、拡大防止、根絶

当所に寄せられる相談の中で、庭や山林に広がるササを何とかしたいという問い合わせが多くなっています。これらについて、まとめてみました。

ササの生態

ササは、イネ科タケ亜科に属する植物の一つです。日本に見られるタケ亜科には、タケの仲間とササの仲間が見られます。ササやタケは、開花までの期間が非常に長く、場合によっては数百年単位ではないかとする研究者もいるほどです。このため、普段は地下茎を伸ばし分布を拡大することが多いようです。

実際ササやタケは、地上部を見ると多数の個体が生えているように見えますが、掘ってみると地下茎でつながっていて、実は一個体だったということが良くあります。菅平高原に自生しているチマキザサを対象として、ササの一個体はどのくらいの広さを持っているのかと調べた事例によると、数mの小さな個体から数百mに及ぶ大きな個体まであったということです(陶山2001)。



庭に植えられたチゴザサ

ササを駆除するのであれば

ササは、寒冷地である長野県でも育つ常緑性の植物であるため、あまり大きくならないコクマザサやチゴザサなどを庭に植え込んで、楽しまれる方も多いと思います。

とはいえ、植えたササも時間がたつと徐々に地下茎で分布を拡大し、気がついたら思わぬ方向に伸びて、始末に負えなくなってしまったということもあるようです。

拡がりすぎて困ったササを始末したいというのであれば、一番簡単なことは、ササを株ごと掘って

しまえばよいのですが、地下茎が残っているとササが再生してしまいます。ササの地下茎は、地上部が出ている地点の周りだけでなく、数m先にまで伸びていることがあります。実際には地面を掘り返してみないとわかりません。とはいえ、地上部とその直下の地下茎を掘りあげれば、勢いを抑える事はできますが、ササを完全に駆除するためには、何年もかけて丹念に掘り取りをくり返す必要があります。

一気にササを駆除したいというのであれば、除草剤が有効です。除草剤によるササの駆除は、秋から冬の散布が適期です。ササは春から夏にいわゆる「タケノコ」として、新しい稈が発生します。新しい稈が成長すると古い稈が枯死します。すなわち秋から冬は、ササにとって見ると来年の新しい稈を発生させるために地下部へ栄養を送り込む時期にあたり、この時期に除草剤を散布すると地下茎まで除草剤の成分が移行する可能性が高くなり、最も効果的に駆除できます。

ササを駆除する除草剤は何種類も発売されており、ホームセンターや農協などで、ササの駆除をしたいということで相談すれば購入することができます。しかし、ササを枯らす除草剤といっても、ササだけを枯らすわけではないので、周囲の状況もよく考えて使用するようにしてください。（除草剤の使用方法については、ミニ技術情報No.34を参考にいただければと思います。）

ササが拡がらないようにするには

庭などにあるササの多くは、植えたところでおとなしくしているうちは良かったけれど、拡がってしまうことが困ると言う方もおられます。

ササが長期にわたって生き続け、地下茎によって個体を大きくしていく性格上、ササが拡がらないようにするには、地下茎が拡がらない工夫をしなければなりません。一般的にはブロックやトタンなどの障害物で区域を仕切り、その中で育てる配慮が必要です。その時に、障害物に隙間を空けないことと、地下茎が地表面でも障害物を踏み越えないように、地上部に障害物が出ている事が重要です。

ササは、いつでも地下茎によって分布を拡げようとしているため、私たちが見逃すような小さな隙間であってもそこを上手に利用して障害物を越えてしまうことがあります。そのため障害物を施工する場合には、注意して施工する必要があります。

お金がかかっても良いから、ある場所から根が拡がるのを防ぎたいという場合には、植物の根の成長点に作用して、拡大を防止するという商品（商品名：バイオバリアー <http://www.ns-green.com/biob/index.html>）も発売されており、街路樹の周りや地下埋設物の保護などに使われています。

参考文献

陶山佳久(2001)遺伝子の指紋：AFLP分析を用いた森林構造の解明（種生物学会編、森の分子生態学、文一総合出版）、P19-37.

担当者 育林部 小山泰弘